審査の結果の要旨

氏名　脇本　竜太郎

社会心理学の研究において，さまざまな社会的行動が,「自尊心の維持」という基本的な動機によって説明されうることが示されてきた。本論文が依拠する「存在脅威管理理論」は,「ではなぜ人は自尊心を必要とするのか」というより根源的な問いに答えるべく提出され，多くの実証研究によって支持されてきた理論であり，死の不可避性の認識によって生じる存在論的恐怖に対する防衛という観点から統合的説明を試みるものである。

存在脅威管理理論は，自尊心の維持と同様に多くの社会的行動の基本動機とされる「他者との関係性への動機」をも説明するとされ，この観点から対人関係に関する研究が積み重ねられてきた。しかし，これまでは対人関係のうち恋愛関係に焦点が当てられ，また新しい関係の形成が主に取り上げられてきた。本研究は,「恋愛関係以外の対人関係」および「関係の維持」について検討することの重要性を指摘し，存在論的恐怖が友人関係の維持に関連する行動に及ぼす影響について,実験的方法を用いて多角的に検討したものである。

まず第Ⅰ部では存在脅威管理理論の歴史的経緯や実証研究の発展を概観したうえで，友人関係の維持に関連する行動をこの理論のもとで検討することの意義を述べている。第Ⅱ部では，以後の研究の前提となる「存在論的恐怖によって友人関係維持へのコミットメントが高められる」ということを実験的に確認した。第Ⅲ部では，友人関係維持のための重要な方略と考えられる「謙遜反応」を取り上げ，対人志向性や他者と調和的に振舞っているという信念の強い個人において，存在論的恐怖が謙遜反応を強めることを示した。第Ⅳ部では，関係維持の意図に影響を与えると考えられる「相手から得られる心理的利得の期待」に注目し，愛着不安傾向の強い個人や愛着回避傾向の弱い個人において，存在論的恐怖が相手から得られる心理的利得の期待を高めることを示した。第Ⅴ部では,「時間」という新たな視点を導入し，まず相手との過去の肯定的経験を時間的に近く感じるほど，関係の評価が肯定的となることを確認した。そのうえで，存在論的恐怖によって，相手からの過去の肯定的働きかけの経験および自分自身の過去の肯定的行為の経験を時間的に近く感じるようになり，関係維持に資する方向の変化が生じることを見出した。

本研究は，存在論的恐怖が友人関係の維持に関連する行動に及ぼす影響のあり方を，手堅い実験研究によって明らかにした点に独自性が認められ,「時間」という視点を導入した点もオリジナリティが高く評価された。また，存在論的恐怖が与える影響が，対人志向性など個人特性によって異なることを明らかにしたことは，理論的な意義だけでなく,「死の準備教育」などにおける実践的意義も大きいと考えられる。研究の対象が大学生に限定されていることから，文化や階層を超えた一般化可能性に関する確認の必要性が指摘されたが，本研究がこの領域で重要な貢献をなすものであり，博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい論文であるという点で，委員の判断が一致した。